「官民連携と地方自治体の転換期」

国際医療福祉大学大学院　医療福祉学研究科
修士課程　保健医療学専攻　看護学分野
公衆衛生看護学領域（実践コース）　１年　須藤星子

松村先生、この度は貴重なお話を聞かせていただきありがとうございました。私は現在、保健師を目ざして勉強しており、卒業後は地方自治体で働くことを考えています。そのため松村先生の話されることひとつひとつが将来自分にも必要となることなのではないかと、とても興味深く拝聴しました。

地方自治体と民間の間に距離があるということは、保健師について学んでいる時にも感じています。私としても、連携が必要な事例について考える時にまず思いつくのは同じ行政の他の部署などであり、民間との連携については後から思いつくことが多い傾向にあります。なんとなく自分の中でも大きく行政と民間とで分けて考えてしまう癖がついてしまっているのだと思います。しかし、地方自治体をより良いものにしていくためには官民一体となることは必要不可欠であり、官民は上下関係でなく同じチームであるという考え方が必要であるということを松村先生のお話から気づかせていただきました。官民で立場や活動の仕方、場所が違っても一緒の方向を見るために、必要なところは残しつつ新しいことを取り入れていくことが必要となっているのだと感じました。

サイボウズのワザで定義している「問題」でいうと問題はあったほうがよく、問題を解決していく過程やその結果の先に成功があるとのことでした。私はこの考え方はどこにおいても重要なものであると思います。役所には問題を抱えることは良くないという文化があり、税金で活動していることから失敗は許されないのではという固定概念が根強くあると思います、そのために安定を大事にしすぎて、結果として新たなことを取り入れにくい環境となってしまっているのだと考えました。問題はあってよい、変化することを恐れないという姿勢が外とのつながりを活発にし、結果として官民連携が進んでいくのではないかと考えます。実際の現場では新しいことをしなくても 1 年が過ぎていくとのことで、何か新しいことや興味関心があることを自分の中で持っていても、行動に移しにくい環境となってしまっているのだと感じました。私は主に健康・保健に関する業務を行っていくことになると思いますが、新しいことを実践することを過度に恐れずに、変化していくことが当たり前という考え方で働いていけたらと思います。

地方自治体が安定していることは悪いことではないと私も思います。しかし、安定を求めるあまりに外から何かを取り入れることを敬遠していると、さらに民間との距離は広がっていってしまうとも思います。松村先生が世田谷区にＳＮＳ等新たなことを取り入れられたように、私も常に何か取り入れられるものがないか、自分のやりたいことができているかなど、自分と向き合いながら働いていきたいと思います。また周りの人がやりたいと思っていることを積極的に話しやすい職場環境を作り、共通のビジョンをもって活動できるような保健師になりたいと思います。この度は本当にありがとうございました。